

## パリッシュの学習者個人に係わる要因を活用した 初年次教育（新生セミナー）の効果検証

Effect of first year education (a freshman seminar) utilizing  
Parrish's individual factors

仲道 雅輝<sup>\*\*</sup>

鈴木 克明<sup>\*</sup>

Masaki NAKAMICHI Katsuaki SUZUKI

熊本大学大学院教授システム学専攻<sup>\*</sup> 愛媛大学<sup>\*\*</sup>

Graduate School of Instructional Systems, Kumamoto University Ehime University

E-mail: nakamichi.masaki.me@ehime-u.ac.jp

あらまし：本発表では、実践対象校で初年次教育科目として開講している新生セミナーを通じて、学習者の学ぶ姿勢を育成しているかどうかの効果検証及び調査項目の提案を行う。その基礎となる調査項目の着眼点をパリッシュの「学習経験の要因モデル」の学習経験のレベルを左右する要因から探っていく。具体的には、学習状況に係わる要因と学習者個人に係わる要因があり、これらの要因によって、学習経験の質が変化すると捉えている。その中で、「学習者個人に係わる4要因」を基盤に調査項目を立案・調査・実施した結果を報告する。

キーワード：高等教育，初年次教育，教育評価，評価方法，学習者要因，

### 1. はじめに

実践対象校では、全学的に初年次教育科目として、新生セミナー（2単位）を1年次前期科目として開講している。全学必修履修科目であり、6学部で開講されている。科目設置にあたっての目的は、新生が大学の授業に円滑に適応していくための「スタディ・スキル」及び将来、就職活動や社会人として、重要となる「コミュニケーション・スキル」を学び、グループワークを通してそれらを実践し、習得することである。テキストは、統一化が図られている。授業担当教員は、各学部教員によって運営する学部と教育企画室教員が担当するものと分かれる。今回は、教育企画室が担当した文系学部48名の学生に対して、学ぶ姿勢の変化に関する調査を実施した。調査にあたっては、パリッシュの「学習者個人に係わる要因」（鈴木2009）を基盤に調査項目を立案した。

本講演では、調査項目の紹介と調査を実施した結果を報告する。

### 2. パリッシュの「学習経験の要因モデル」

#### 2.1. 概要

「学習経験の要因モデル」（鈴木2009）によれば、学習経験のレベルは投入あるいは関与（Engagement）の度合いにより、無経験・機械的繰り返し・ばらばらな活動・心地よい習慣・挑戦的な企て・美学的経験と順次高まっていく。学習経験のレベルを左右する要因としては、学習状況に係わる要因（直接性・可塑性・切迫性・共鳴性・一貫性）と学習者個人に係わる要因（意図・プレゼンス・開放性・信頼感）がある。これらの要因によって、学習経験の質が変化すると捉えている。

#### 2.2. 学習者個人に係わる4要因

鈴木（2009）によれば、パリッシュの学習者個人に関わる4要因を次のようにまとめている。

##### (1) 意図（Intent）

個人が持ち込む学習目的や興味に留まらず、態度・価値・期待・信念・嗜好・自らが置かれていると思う立場の認識などを含む広範なもの。哲学という指向性（intentionality）で心理学研究の課題全般を含む。インストラクタやインストラクショナルデザイナーが持ち込む意図と絡んで経験の質を左右するが、学習者が自らの意図を意識した場合には経験の質が高まる可能性が増す。

##### (2) プレゼンス（Presence）

心身ともに「そこにいること being-there」で状況の理解につながる関与が始まる。他者を助ける共感を伴い積極的に貢献しようとする「ともにいること being-with」で対話や異なる視座からの学びを可能にする。さらにあるがままの自分の思いや感情をさらけ出して「らしくあること being-one's-self」ができると、自分には学ぶ必要があるという現状を素直に認めて学びの契機となる（そうでないと自分が学ぶ必要があることすら認めずにいることになる）。

##### (3) 開放性（Openness）

与えられるままに受け入れるという意味ではなく、個人としての信念やこだわりは守りつつも、それが変化していくことを拒まないという気持ち。開放性とは弱さではなく強さを示すものであり、状況にのめりこんでいくためには必須の要素となる。

##### (4) 信頼感（Trust）

良い結果が生まれることを信頼し、疑念を保留し、

辛抱強く、直近の報酬がなくても関与し続けられること。何らかの解決策が必要とされる困難な状況に置かれても、好転する可能性を信頼し、期待感を持って精神的・感情的にコミットできること。そして、期待通りの結果が得られなかったときは、寛容の心で接し、状況が修復できることをも信頼すること。

### 3. 調査

#### 3.1. 調査概要

新入生セミナーの受講生が、「自ら何を目指して学習経験に参画しているのかをしっかりと意識し(意図)、この学習経験をよりよくするために貢献できることを求めて恥をかくことを厭わず(プレゼンス)、オープンな心で提供されるものを受け入れる心の広さをもち(開放性)、きっとこの学習体験から何か大切なものが得られるに違いないとの確信を持っている(信頼感)。(鈴木2009)といった認識へと変化していることを調査する。この調査結果により新入生セミナーの内容・実施を通して、学習者個人の学習経験に関わる4要因へ影響を及ぼしているかどうかの評価を行う。

#### 3.2. 調査方法・対象

調査方法は、紙による質問用紙に回答してもらった形式で調査した。調査期日は、最後の授業終了時(受講後)に実施した。調査対象は、法文学部人文学科夜間主の1年生(48名)である。回答率は、48名全員回答を得ることができ100%であった。回答形式は、選択式(4択)とし、最後に自由記述欄を設けた。

#### 3.3. 調査項目

学習者個人に係わる4要因を基礎に、質問項目を検討し、表1から表8のとおり、提案・実施した結果を報告する。

#### 3.4. 調査結果

質問項目に対して、受講前と受講後では、「強くそう思う」「まあそう思う」が大半を占める割合が高まっていることが確認できた。同じく「全くそう思わない」を受講前には選択されているものが、受講後は、ほぼ選択されなくなっていることも確認できた(表1~8参照)。また、自由記述からは、「資料を丁寧に工夫されていることが伝わり、自身の積極的に聴こうと思うことができた」「こんなものかなと思っていましたが、新しい発見や新たな情報を知ることができて良かった」「大学生活に必要な基礎を学べ、これから大人になるために役立つと思った」等、講師の工夫や内容の充実も受講態度に影響を及ぼしていることが伺える。

#### 4. まとめと今後の展望

初年次科目として開講している新入生セミナー

表1~8: 調査結果				
表1:【設問1】あなたが自身が学びたいと思っていることに関連する内容が得られると思って受講していましたか。(意図)				
選択肢	4	3	2	1
受講前	3	28	16	1
受講後	12	34	2	0
表2:【設問2】「自分は学ぶ必要がある」という現状を自覚して、受講していましたか。(プレゼンス)				
選択肢	4	3	2	1
受講前	10	23	13	2
受講後	22	22	4	0
表3:【設問3】最初から「何でもとりあえず受け入れよう」という気持ちをもっていましたか。(開放性)				
選択肢	4	3	2	1
受講前	9	29	8	2
受講後	19	26	3	0
表4:【設問4】「何かで必ず役に立つことが学べるはずだ」と信じて/思って受講していましたか。(信頼感)				
選択肢	4	3	2	1
受講前	9	27	11	1
受講後	19	28	1	0
表5:【設問5】積極的に学習しよう!自分でも実践しよう自ら学ぼう!と思った/思えた授業はありましたか。(複数回答可)				
大学での学び入門	7			
ノートの取り方	19			
情報整理法	18			
図書館の活用方法	21			
読解の基礎	19			
レポートの書き方	36			
プレゼンテーション	27			
表6:【設問6】これから大学生として学ぶための心構えができたと思いますか。				
選択肢	4	3	2	1
受講後	10	34	4	0
表7:【設問7】後輩にも勧めたいと思いますか。				
選択肢	4	3	2	1
受講後	7	39	1	1
表8:【設問8】いつものあたりに着席していますか。				
前方	真ん中	後方	毎回バラバラ	
14	19	13	2	
注1) 選択肢は、4: 強くそう思う、3: まあそう思う、2: あまりそう思わない、1: まったくそう思わない、				
注2) 単位: 人				

を通じて、学習者の学ぶ姿勢の育成には、効果を発揮していると示唆される。自由記述からは、講師のパワーポイント等資料に工夫を凝らしていることなどの授業準備の度合いによっても学生への学習意識に影響を及ぼしていることも示唆される。学習者個人に係わる4要因を基盤に調査項目を立案し、実施した結果として、一つの評価指標となりうると思われる。学習者個人の4要因に着目し、調査を継続していきたい。そして、今後の授業展開や学ぶ姿勢を育成する上で、学生は、どこで、意識変容を起こしているのかを明らかにしていきたい。

#### 参考文献

鈴木克明(2009), 学習経験の質を左右する要因についてのモデル, 教育システム情報学会, 24(4) pp74-77,